

あるむぜお114

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 114

2015年12月20日



市内住吉町の盆棚 (1992年8月1日撮影 内藤治氏提供)

目次

- 1-2 カイコがつくった風景
 - ③ カイコのためにお盆も変える
- 3 展示会案内
 - 特別展 カイコとくらしのむかし
- 4-5 ノート 撮影されたゴシュウギ
- 6 多摩川おさかな考
 - ⑦ コイの裁定
- 7 最近の発掘調査
 - 中国唐代の焼き物
- 8 連載『泉居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活
 - ③ 盗人の流行

カイコがつくった風景

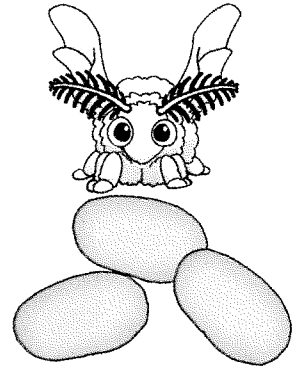
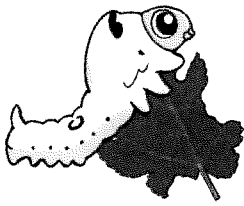
養蚕まづさくは府中の昔を知るうえで欠かせないものです。しかし現在、府中で養蚕は行われておらず、人びとの記憶からも消えつつあります。博物館では、府中の養蚕を再発見する特別展を、平成28年2月～3月に計画しています。本コーナーでは、府中と養蚕の関わりを、カイコの生育とともに紹介します。

③カイコのためにお盆も変える

盆行事では、迎え火を焚たきき、先祖をまつる棚たな（盆棚）をつくりお供えをし、最後に送り火を焚たききます。府中では、8月1日前後にこれを行う家があります。この日どりは、養蚕を最優先にした結果なのです。

特別展

カイコとくらしたむかし



カイコ（カイコガの幼虫）を育て、生糸の原料となる繭をつくる養蚕は、市域はもちろん、各地で行われていました。多摩地域では養蚕、そして絹織物の産地として、「桑都」とも呼ばれる八王子が江戸時代から知られていますが、府中市域においても養蚕はさかんでした。

明治になり、輸出品として繭、繭からとった生糸、さらに生糸を織ってつくる絹の需要が高まると、日本の養蚕はさらに活発になりました。農家にとって大きな収入源になるためです。明治後期～大正頃には、カイコのエサとなる桑畑が広がり、養蚕を行う家が増えていきました。カイコが育ちやすい環境をつくるために、家屋の改造を行ったり、年中行事の日程を変更したりすることまであったのです。

昭和初期に輸出用繭の相場は暴落します。さらに1938年（昭和13）、生糸にかわる化学繊維のナイロンが発明されます。こうしたことから人びとは徐々に養蚕をやめていきました。そして現在、市域で養蚕を行っている家は1軒もありません。都内でも数件しか残っていないそうです。桑畑も見るものがなくなりました。

しかし現在でも、カイコを飼っていた記憶とともに、養蚕にまつわる道具や行事などが残されています。博物館にも、養蚕とともにあったくらしを語る資料がたくさん保管されています。

この展示会では、おもに明治から昭和にかけての、養蚕とくらしについて紹介します。もちろん、カイコがどんな生きもので、府中ではどうやって育てて繭にしたのか？という、養蚕の基本についても解説します。それにより、カイコがもたらしたくらしの変化を追体験したいと思います。

（佐藤智敬）

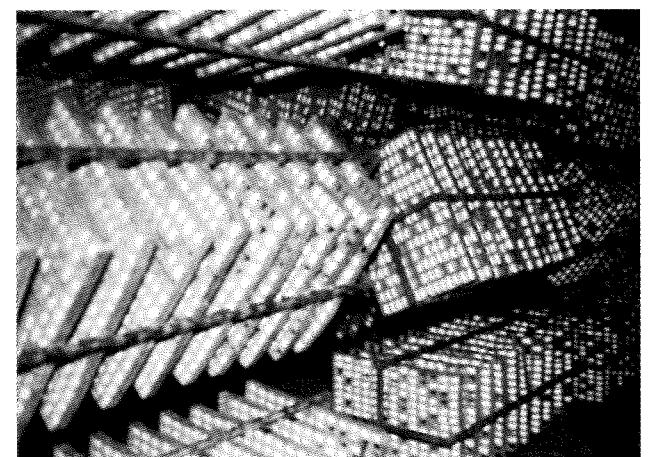
 会場：本館 1階 特別展示室（観覧無料）
 会期：2月6日（土）～3月13日（日）



カイコを飼う棚の前で桑の葉をきざみ、餌をやっている様子（1921年頃）



桑の葉を食べ、育っていくカイコ（1970年頃）



回転マブシの中にできたマユ（1970年頃）



花嫁を中心に記念撮影（1953年3月、山本嘉次郎氏撮影）

▼ 企画展「府中のゴシュウギ」開催の経緯

きっかけは2014年（平成26）、博物館ボランティアからの情報でした。「近所の梨農家の奥さんが、昭和20年代に府中に嫁入りした際に着用した花嫁衣装を保存されていて、当時自宅で行った結婚式のことも詳しく記憶されています。嫁入りの際の写真まで残っていますよ。一度話を聞いてみては…」博物館には、冠婚葬祭の際使用した食器類や、結納品目録などはありましたが、完全な形で残る、自宅で行う結婚式で着用した衣装はありませんでした。府中市域を舞台に、結婚式場ではなく、自宅を会場として行っていた結婚式（ゴシュウギ）の様子を、衣装の思い出とともに聞くことができる絶好の機会と考え、調査することにしました。

T.M（1925年生まれ男性）さん、I.Mさん（1928年生まれ女性）ご夫婦。1953年（昭和28）3月に結婚されたそうです。Iさんは現在の稲城市東長沼で生まれ、24歳のときに多摩川を渡って実家と同じ梨農家を営むM家に嫁いできました。そして嫁入りの日以来50年以上、結婚式で着用した打掛けや角隠し、筥迫や扇といった花嫁の携帯品、さらには当時はいた草履なども大切に保管されてきました。目立った虫害やよごれもなく、

貴重な資料であると思われ、Iさんも博物館で保存することを承諾してくださったため、寄贈資料として受け入れることとなりました。

この結婚の数年後、Tさんの弟たちは、自宅ではなく大國魂神社の参集殿で挙式したといひます。昭和30年代になると、料理屋などでも結婚式や披露宴が行われるようになります。そして1970年（昭和45）には、市立の結婚式場ができるなど、自宅開催の負担が軽減されることとなり、家を会場としたゴシュウギは行われなくなっていくます。寄贈していただいた資料は、その意味で、自宅で行われた結婚式に関わる、ほぼ最後の時期のものでした。

聞き取り調査から、ゴシュウギの話題も豊富に聞くことができました。嫁ぎ先の府中まではタクシーで来たこと。家にはじめて入るときは二本の松明を消して交差させたものをまたぎ、勝手口から入るといった風習があったこと。三々九度のしきたりや、披露宴がとても長かったことなど、思い出話は尽きませんでした。こうした話をもとに、Mさんから寄贈していただいた資料をひとつの核とし、その他ゴシュウギに関する資料を展示した企画展「府中のゴシュウギ」を本年4月11日～6月28日の間実施しました。

▼ 嫁入り写真と撮影者・山本嘉次郎

ご夫婦からは、もう一つ重要な資料が寄贈されました。結婚式の日撮影された、花嫁の写真です。残念ながら会場写真は残されていませんでしたが、実家を出る際に花嫁衣装を着用して家族とともに撮影された、それもカラー写真だったので、ご寄贈いただいた花嫁衣装を着て角隠しをかぶった花嫁を囲んで、実家の親族とともに撮影されたものなど計4カットがスライドで残されていました。これにより、資料の由来や使用方法を裏付けることができました。

被写体だった花嫁1さんは、この写真撮影のこともよく覚えておられました。撮影者は映画監督として知られていた山本嘉次郎(1902～74)だったというのです。山本嘉次郎とは、戦前～戦後にかけて90本以上の映画の監督をつとめ、エノケンとして知られた榎本健一主演の喜劇や、『ハワイ・マレー沖海戦』といった戦記物、菊池寛原作の『真珠婦人』などさまざまなジャンルをこなした映画監督です。当時ラジオ番組などにも出演する著名人で、1さんもよく知る人物でした。「その日山本さんは真っ白なスーツの上下で現れた」のだとか。当時山本氏は近隣の梨農家の取材、撮影をしていたそうです。映画内で梨農家の結婚のシーンがあり、実家もやはり梨農家だった1さんがその日結婚するという情報を聞きつけ、急ぎよ取材に来たのだそうです。そしてその際撮影された写真が、後日山本氏から送られて来たのだといひます。まだカラー写真が広まっていない頃の写真ですから、この点でも貴重といえます。

▼ 映画『花の中の娘たち』

さて、山本嘉次郎はどんな映画の撮影で稲城の梨農家に来ていたのでしょうか？それはM家でも謎でした。ひょっとしたら結婚式の後に山本氏が制作した映画の中にその答えがあるかもしれないと考え、調べてみました。すると、この結婚式から半年後の1953年9月、「花の中の娘たち」という映画が公開されていることがわかりました。おそらくその取材に間違いはないでしょう。

本作品は、映画配給会社である東宝最初のカラー映画で、杉葉子、岡田茉莉子、小林桂樹といった有名俳優が起用されています。多摩川を隔てた多摩地域・都心に近い梨農家の2人の娘を主

人公に、昭和20年代の都会と農村の仕事や恋愛、そして結婚が主たるテーマになっています。映画の舞台としては川崎市多摩区あたりを設定しているようですが、その延長で隣接する稲城の梨農家も撮影、調査対象となったのだと思われます。

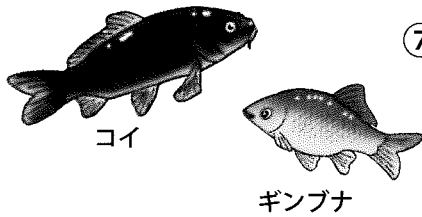
映画のあらすじを調べてみると、多摩川に橋を架ける工事により農村も開発されていく様子を描いているようです。その一方で、嫁入りの際、勝手口から花嫁が入る古くからの風習が行われている農村も紹介され、最後にはそれをやめ正面入口から入るといった、風習の変革を象徴的に扱ったシーンも登場するようです。山本氏が1さんを撮影したのは、花嫁のモデルとしての取材だったと思われます。

しかしながらTさん1さんご夫婦は、この映画をご存知ありませんでした。配給元の東宝に確認してみたところ、フィルムはあるが、現状ではDVDどころか、ビデオ化すらされていないということです。時折昔の映画として上映されるだけということで、筆者もまだ鑑賞できていません。山本氏の取材は本当に偶然のことだったのだと思いますが、その成果は無駄にならなかったのでしょうか。映画の中でどこまで取材の成果が反映されているのか、興味が尽きません。

「我が家の結婚式の記念」として保管されていた衣装や写真から、日本の映画史や多摩地域の開発など、深いテーマへと広がったことは予期せぬ収穫でした。今後この映画を見る機会があれば、昭和20年代のこのあたりの婚礼習俗や梨農家の様子、開発の進行具合などがもっと具体的に分かるのではないかと期待しています。



1953年9月公開 映画「花の中の娘たち」ポスター(個人蔵)



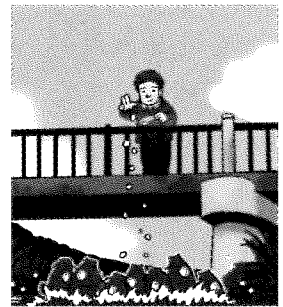
⑦ コイの裁定

かつて多摩川は、公害による汚染で一時的に魚の数が減ってしまいました。「コイくらいは住めないのではないか？」と言うことで、漁協によるコイの放流が続き、水質が復活した現在でも大型化した個体が大量に生き残っています。数年前からは、コイヘルペスの蔓延で放流を中止していますが、それでも多摩川には異常にコイが多いという見方があります。汚れている場所に住むイメージが強い魚ゆえ、きれいになった多摩川に目立つのを良しとしない意見もあります。そこでひとつ、良し悪しを考えてみましょう。

コイは、同じコイ科のフナと外見こそ似るものの、フナとは違って頭や目が体に対して小さく、さらには2対の口ひげがあります。体長も大きくなれば1mに達するものもいます。元々は中央アジア原産で、環境適応性が高く、また食用を目的に養殖・放流が盛んに行われたため世界中に分布したと考えられていました。日本国内に分布するコイのルーツも中国から移入した種であることが、しばらくは定説となっていた時代がありました。しかし、琵琶湖や各地の河川で野生のコイが確認・報告され、第三紀の地層から化石も見つかっていることから、日本においては古来自然分布していたものと改められています。養殖種のニシキゴイとは異なり、野生のコイは体高が低く、ほぼ円筒形で黒褐色の地味な姿です。

多摩川のコイは中下流域から汽水域の流れの緩い場所に生息し、暖かい所を好むので、冬場は深場に集まって越冬します。そして、春が訪れ産卵期を迎えると、浅瀬を求めて多摩川の支流である浅川や野川などへ入り込んで行きます。実はコイの数が目立つのは、この支流の方と思われます。産卵を終えてもコイは本流に戻らず、支流に定着するようなのです。それは、橋の上からコイの一群を見下ろす人々たちによる給餌が大きな理

由です。また、支流には家庭排水がそのまま流れ込む箇所もあるので、本流よりも有機物の量が豊富で、餌に事欠かない利点もあったのです。支流のコイは、大雨による増水で本流に流されても再び戻って来ると言うのですから利口です。



人からの餌をあてにする

本流のコイも橋の下がお気に入りです。コイが住む中下流域では、度々河川改修工事が行われ、流れが広く浅い平坦な部分が多くなっています。ゆえに橋脚付近はある程度の深さと淀みが保たれ、コイにとっては安心していられる場所というわけです。大きな橋に覆われているので、上空からの天敵襲来も防げる特典付きです。橋を離れるとコイの数は極端に少なくなります。多摩川の水が浄化されるに連れコイの数も減っては来ました。釣り人の間でも絶対数が減った感じがすると言う声を聞きます。多摩川のコイが多いと思えるのは、人が確認しやすい場所にこそ群がっているからではないでしょうか。餌がある場所に生き物は集まります。多摩川は典型的な都市河川であり、人の少ない山間部の川とは違います。人為的関与に支えられたコイが大型化して生息するのは当然のことかも知れません。

コイは、何でも食べる雑食性の魚と言われますが、しばしば川底に頭を突っ込んで食べているのは、ユスリカの幼虫（アカムシ）です。本流には処理水を戻していても、支流から流れ込む有機物は絶えず、富栄養化した水中にユスリカは年中発生します。仮にコイが、多摩川や支流から姿を消せば、たちまちユスリカの大発生を呼び起こすこととなります。多摩川にコイが泳ぐのは悪いイメージと考えるのではなく、あくまでも生活に密着した都市河川・多摩川の食物連鎖を守る一員と捉えることで、欠かせない存在に思えるのです。今後も都市を流れる多摩川の生態系バランスを保つには、決してコイを悪者扱いにすることは出来ないでしょう。

中国唐代の焼き物

日吉町一丁目 府中市ふるさと文化財課 湯瀬 禎彦



越州窯の青磁（左：1682次調査 右：230次調査出土）

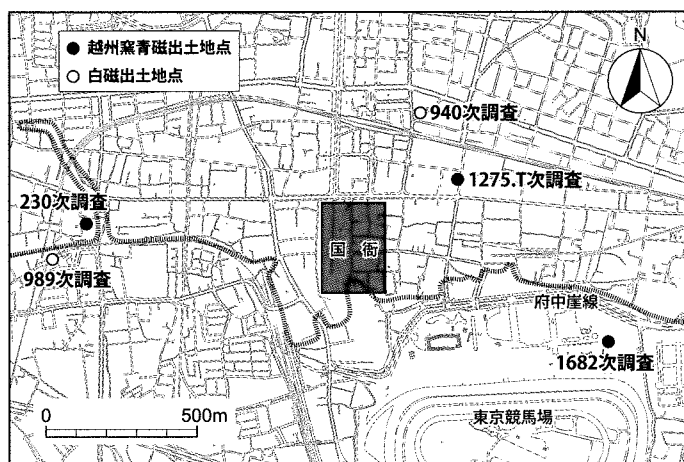
今回は、今年の春先に日吉町の東京競馬場構内で行われた1682次調査で出土した大変珍しい焼き物を紹介します。それは中国唐代の越州窯で生産された青磁で、オリーブ色をした独特の色合いが特徴の焼き物です。

越州窯青磁は当時のアジアや中近東などへ広く輸出されました。日本では九州の大宰府に置かれた鴻臚館という外交施設がこの焼き物の一大消費地かつ取引場所であり、その遺跡から大量の破片が出土しています。また、畿内の平城京跡や平安京跡などでまとまった量の破片が発見されています。しかし、関東の遺跡から出土することは稀で、東国ではきわめて貴重な焼き物であったようです。

府中市内では、これまでにこうした越州窯青磁が宮町一丁目の1275.T次調査で1例（3片）確認されていて、東京競馬場構内で新たに発見されたものは2例目となります。さらに最近、過去の市内発掘遺物を再点検したところ、片町二丁目の230次調査の出土遺物のなかにも越州窯青磁が1点含まれていることを確認しました。

ところで、唐から日本などに輸出されたもう一つの代表的な焼き物として、定窯または邢窯という窯場で生産された白磁があります。こちらに関東の遺跡からはめったに出土しませんが、市内では府中町二丁目の940次調査と分梅町一丁目の989次調査で各1点が発見されています。

東国では入手が困難であった唐の焼き物が府中市内で複数確認されているのは、府中の地に古代武蔵国の中心地の国府が置かれていたためです。武蔵国府へは国司が都から携えてきたと考えられますが、その出土地付近からは国司の居住痕跡などは見つかっていません。当時の焼き物のなかで最高級品といえる唐の青磁と白磁が国府でどのように使われ、それぞれの発見場所にもたらされたのか、その解明が今後の課題です。



青磁と白磁の出土地点

連載 『県居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活

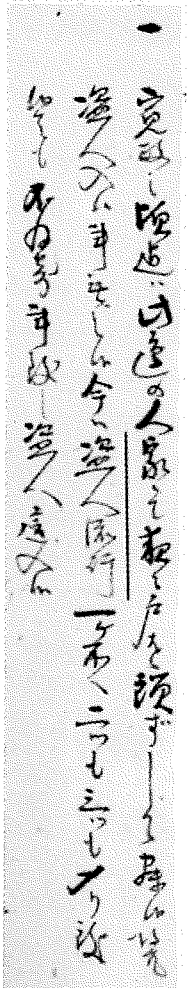
『県居井蛙録』は、住吉町の旧家・内藤治右衛門家に残されていた、享和2年(1802)から天保7年(1837)にいたる日々の記録です。4代当主重喬と、5代当主重英によって著されたこの史料には、当時の庶民の生活に関わるさまざまな出来事が記されています。本コーナーでは、毎回テーマを決めてその内容を紹介したいと思います。

今回は、内藤治右衛門家6代当主の重鎮が天保14年(1843)に書き記したこんな一文から始めたいと思います。

寛政の頃(1789～1801)までは、戸締りをしないで寝ても盗人(泥棒)に入られることはなかったが、今は何重に戸締りをしても、思いもかけない方法で入ってくる。

「昔は鍵をかけなくても大丈夫だったのに…」と、今もどこかで耳にするような話ですが、このような状況を重鎮は「盗人流行」という言葉で表しています。重鎮に「流行」と言わしめる状況はどのようなものだったのか…、『県居井蛙録』から関連記事を拾ってみましょう。

文政12年(1829)8月、下川原(現南町)の松五郎が所々で盗みを働いて、火付盗賊改の役人に捕えられました。その罪状には、同じ村の善五郎から盗んだ鋤を、本宿村小野宮(現住吉町)の質屋・文右衛門へ質入れし、400文を受け取った事件も含まれており、文右衛門も取調べを受けることになりました。当時、盗品の換金手段として質屋や古着屋が利用された



重鎮が記した盗人に関する一文。棒線部分に「盗人流行」とある。

③盗人の流行

め、幕府はそれらの商売を営む者に品物の出所を確かめるように命じていたのです。取調べの結果、文右衛門は質代金と同額の400文を取り上げられたものの、他にお咎めはありませんでした。実は5か月前にも文右衛門は同様の失敗をして、質代金と同額を差し出しています。盗品にお金を渡してしまった者は、同額の罰金を科せられることになっていたのかもしれませんが。

そのほか、天保3年11月に府中宿の旅籠屋に宿泊していた勘定奉行の下役が計13品を盗まれたり、天保5年6月に大麦・小麦3俵が持ち去られたりなど、さまざまな盗難事件が記されています。火事や盗難が多く物騒だとして、天保5年3月5日に治右衛門家では高幡山不動尊へ護摩祈祷を頼み、同7日には本宿村(現西府町)と十数か村が協力して盗賊狩りを行っています。確かにこれは「盗人流行」といえる状況でしょう。

ところで盗人が捕まると、被害者は参考人として役所に呼び出され、取調べを受けることとなります。これは当事者にとっては「泣き面に蜂」で、盗難にあった上に、取調べ場所に赴く手間や費用など新たな負担がかかります。このため内々に「取捨」を願い、被害者から除いてもらうことがあったようです。天保4年に甲州(現山梨県)出身の武五郎が捕えられた際には、中川原村(現住吉町)・本宿村・砂川村(現立川市)の三か村が火付盗賊改の役人に内々に「取捨願」を提出しています。記載はありませんが、これには何らかの付け届けが必要だったと思われる。『県居井蛙録』の「続編一」には、天保8年になんと盗人本人にお金を渡して、自宅へ盗みに入ったことを公にしないように頼んでいる事例もあるのです。そこまでして取調べを避けたいとは…。盗難事件を追ううちに明らかになったことですが、これも当時の社会の側面として興味深い事象ではないでしょうか。(花木知子)